火傷した神様

田中貢太郎

一

天津神(あまつかみ)国津神(くにつかみ)、山之神(やまのかみ)海之神(うみのかみ)、木之神(きのかみ)草之神(くさのかみ)、ありとあらゆる神がみが、人間の間に姿を見せていたころのことであった。

その時伊豆国(いずのくに)に、土地の人から来宮様(くのみやさま)と崇(あが)められている神様があった。

伝説にもその神様がどんな風采(なり)をしていたと云うことがないから、それははっきり判らないが、ひどく酒が好きであったと云うところからおして、体が大きくてでっぷりと肥り、顔は顔で赧(あか)く、それで頬(ほお)の肉がた

るみ、そして、二つの眼は如何（いか）にも柔和で、すこしの濁気（にごりげ）のない無邪気な光を湛（たた）えていたように思われる。

その来宮様は、某日（あるひ）例によってしたたか酒を飲んで帰って来た。その時は師走（しわす）の寒い日であったが、酒で体が温まってほかほかしているので、寒さなどは覚えなかった。

「ああ佳（い）い気もちだ、人間どもは、逢（あ）う者も逢う者も、首をすくめ、水洟（みずばな）をたらして、不景気な顔をしているが、ぜんたい、どうしたと云うのだ」

来宮様の眼には、路傍（みちばた）の枯草がみずみずした緑草に見え、黄いろになった木の葉の落ちつくした裸樹（はだかぎ）が花

の咲いた木に見えていたのであろう。

「こんな、佳い日に、人間どもは、何をあくせくしているのだ」

来宮様はそうそうろうろうとして歩いた。それを見て土地の者は土地の者で、

「今日も来宮様は佳い気もちになって、歩いてらっしゃるが、此の寒いのに、あんな容(ふう)をして、寒いことはないだろうか」

と云う者もあれば、

「そこが酒だよ、酒をめしあがりゃ、寒いも暑いもないさ。酒は天の美禄(びろく)だと云うじゃねえか」

と云うようなことを云って笑う者もあった。さて来宮様は、土地の人間どもの寒そうな顔をして、あくせくしているのを憐みながら己（じぶん）の住居（すまい）の近くへ帰って来た。其処（そこ）は森の中で、入口には古ぼけた木の華表（とりい）があった。来宮様はその時ひどく眠くなっていた。

「ああ、眠い、眠い、眠くてしかたがないぞ」

夢心地になって華表の下まで来たところで、もう一歩も歩かれなくなったので、そのまま其処へころりと寝てしまった。

ちょうどその時、二人の旅人が華表の近くへ来て休んでいたが、あまり寒いので、一方の旅人が、

「どうだ、火を焼（た）こうか」
と云うと、一方の旅人も、
「いいだろう」
と云って、さっそく二人で枯枝を集め、腰の燧石（ひうち）で火を出して、それを枯枝に移して暖まりながら話しこんでいるうちに、強い風が吹いて来た。旅人はあわてて、
「こりゃ、いかん」
「燃えひろがっては、たいへんだ」
と云って、二人で火を踏み消そうとしたが、火は消えないでみるみる傍の枯草に燃え移り、それから立木

に燃え移った。旅人はますますあわてて、木の枝を折って来て叩き消そうとしたが、火はますます燃えひろがるばかりで、手のつけようがなかった。

「こりゃ、いかん、村の者に見つかったら、たいへんだ」

「そうだ、たいへんだ、逃げよう」

二人はしかたなしに逃げて往った。その時来宮様に使われている雉(きじ)がいた。雉は森へ火の移ったのを見ると、これも旅人以上に驚いて、御殿の前へ往ってはらしていたが、神様のことも心配なので、華表の処まで来たところで、来宮様は暢気(のんき)そうに華表の下で

鼾（いびき）をかいて眠っていた。雉はまあなんという暢気な神様だろうと呆（あき）れたが、ぐずぐずしていられないので、
「たいへんです、たいへんです、神様、火事です、たいへんです」
と云って狂気（きちがい）のようになって叫んだが、来宮様はいっこうに起きない。火はもう傍へ来て、今にも華表に燃え移りそうになって来た。雉は気が気ではない。
「たいへんです、たいへんです、起きてください、起きてください、神様、火事です、火が燃えつきます、神様」
雉の声がやっと通じたのか、来宮様はううと云うよ

うな唸（うなり）声を出した。雉は此処（ここ）ぞと思って、

「起きてください、火事です、火が燃えつきます、たいへんです」

と叫ぶと、来宮様はやっと眠りからさめかけた。

「うう、うう、ううん」

「ううんじゃありません、火事です、たいへんです、起きてください」

「やかましい、たれだ」

「たれもかれもありません、そんなことを云ってる場合じゃありません、起きてください、たいへんです」

「雉か」

「雉ですから、早く起きてください、たいへんです」
「なにがたいへんんだ、そうぞうしい。それより、咽喉がかわいた、水を一ぱい持って来い」
「だめです、そんな暢気なことを云ってちゃ、焼け死にます、早く起きてください」
「酒を飲んで焼け死ぬ奴があるか、水を持って来い」
火はもうその時華表に燃え移っていた。雉は半狂乱になっていたが、大きな胴体をしている来宮様を抱いて往くことができなかった。
「早く、早く、早く起きないと、焼け死にます、早く、早く」

「なにを、そんなにあわてるのだ」

来宮様がやっと正気になって、顔をむっつりあげた時には、もう華表は一面の火になっていた。それにはさすがの来宮様も驚いて逃げようとしたが、焔(ほのお)に包まれたので逃げることができなかった。

そこへ土地の者がかけつけて来て火を消し、来宮様を御殿へ伴れて往っていろいろ介抱したが、火傷(やけど)がひどかったので、それがためにとうとう殁(な)くなってしまった。

二

その来宮様のいた処は、今の静岡県（しずおかけん）加茂郡（かもごおり）下河津村（しもかわづむら）の谷津（やづ）であった。某年（あるとし）の十二月二十日比（ごろ）、私は伊豆（いず）の下田（しもだ）へ遊びに往ったついでに、その谷津へ往ったことがあった。

谷津には温泉があった。私は下田からの乗合自動車に乗った。その途中には共産村として有名な白浜村（しらはまむら）などがあった。

河津川の口で自動車をおりて、川土手をすこし往くとすぐ谷津であった。その付近は昔の河津の荘（そう）で、曾我物語（そがものがたり）に縁古のある土地であった。路の左側に石の

華表（とりい）のある社は、河津八幡宮（かわづはちまんぐう）で、元の祭神は天児屋根命（あまこやねのみこと）であったが、後に河津三郎祐泰（さぶろうすけやす）及びその子の祐成（すけなり）、時致（ときむね）の三人を合祀（ごうし）したものであった。そこには館（たち）の内（うち）と云う小字があって、祐泰の宅趾（やしきあと）と云われ、祐泰の力持をしたと云う石もあった。

ちょうど午（ひる）で、私は温泉宿に入って、一ふろあびて一ぱいやるつもりをしていたが、さて何処（どこ）へ往っていいのか見当がつかない。何人（たれ）かによさそうな家（うち）を聞いてはいろうと思っていると、温泉宿の婢（じょちゅう）らしい女が前を往くので、

「もし、もし」

と云って呼びとめ、
「このあたりで、何という家がいいのでしょう」
と云うと、女は、
「さあ、何処がいいでしょうね」
と云った。私は女が己（じぶん）の家をほめることも出来ないが、それかと云って他へ客をやりたくもないと云う気もちでいることを知った。そこで私は、
「姐（ねえ）さんの家（うち）は、何処（どこ）だね」
と云うと、女は、
「中津屋（なかつや）でございます」
と云った。私はさっそく中津屋へ往くことにして女

に跟(つ)いて往った。「やつがはし」とした小溝(こどぶ)にかけた橋を右にして、新道を折れると温泉街であった。

私は中津屋へ入って、まず温泉に入り、それから二階へあがって雑記帳を啓(あ)けていると、彼(か)の女(おんな)が来て、

「御飯はどういたしましょう」

と云った。私は飯の注文をして、

「ついでに一本持って来てもらおうか」

と云った。

すると女はにやりと笑った。

「お気のどくですが、来宮様のお祭でございますから、旦那は御存じでしょう」

と云った。私は何も知らないので、
「何も知らないが、来宮様のお祭って、なんだい」
と云うと、女はまたにやりと笑って、
「御存じでしょう、旦那は」
と云って、私がしらばくれているような云い方をするので、
「知るものか。なんだい、来宮様がなんだい」
と云うと、女ははじめて私が何も知らないことを知ったのか、
「御存じないですか。来宮様は、お酒が好きで、酒を飲んで、寝ておりますと、火事になって、火が華表（とりい）の

傍まで燃えて来ても眼が覚めんものですから、鳥が来て起してくれましたが、起きられないで、火傷（やけど）をしましたから、それで、暮れの十七日の夜の十二時から、むこう一週間、酒を飲まんことになっております」

と笑い笑い云った。

「そうかい、そいつはいかんな」

「お気のどくですが、それで、来宮様のお祭には、この土地では、一切酒を飲まないことになっておりますから」

「それじゃ、酒がなくてはいられない者は、どうするのだ」

「その方は、他の村へ往くのですよ」
「そうか、それじゃだめだね、今日は」
「お気のどくですが」
一ぱいやろうと思って楽しみにしていた私も、あきらめるより他にしかたがなかった。
「それじゃ、しかたがない、飯だけ」と云ってから、
「しかし、これが毎月（まいげつ）だと、金がのこるなあ」
酒ぬきの飯を喫（く）った私は、其処を出て河津川縁（べり）に往き、其処の橋を渡って上流（かわかみ）へ往って、田の中の森にある来宮神社（くのみやじんじゃ）へ往ってみた。

底本：「怪奇・伝奇時代小説選集３　新怪談集」春陽文庫、春陽堂書店
１９９９（平成11）年12月20日第1刷発行
底本の親本：「新怪談集　物語篇」改造社
１９３８（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２００４年９月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。